

釧路湿原周縁における縄文早期の小貝塚について

西 幸隆・澤 四郎

はじめに

昭和50年5月、偶然の機会から北斗遺跡第1地点で、縄文早期の小さな6ブロックからなる貝塚が発見された。このささやかな情報は、釧路湿原周縁の台地にみる縄文時代に所属するすべての貝塚がその東縁に分布するという事実から出発した岡崎由夫氏や筆者(澤・西1975)らの考えに対し、修正を要求するものである。岡崎氏の古釧路湾西部についての見解は、古阿寒川により運ばれる土砂で河口から海湾が広く埋立てられ、土砂の供給量は、海進の速度を上回り、河口の扇状・三角州を発達させ、縄文前期以降の海進のマキシマム以降にはこれに釧路の地盤の増傾斜運動が加わり、縄文時代全般を通じて、この一帯に貝塚を残すだけの生息環境が用意されていなかったとするものである(岡崎・1974・岡崎・鈴木 1975)。筆者らも大筋において、これに従うものであったが、縄文早期の小貝塚の出現と、その東縁への扁在から、増傾斜運動の影響を早期までさかのぼらせて考え、東部の低地では早くから内湾が形成された形跡があると考えたのである(澤・西・1975)。

しかし、北斗遺跡第1地点の小貝塚は、このような考えを否定するものとなったのである。発見時にこの地点を共に踏査された岡崎由夫氏は地史の立場から、西部の阿寒川による埋立ては遅れ、同氏が考えていたよりも早期の海域は南部や中央に限らず、奥深く及んだに違いない。この海はマキシマム以前の浅い水深で終わったが、これは傾動で西側からの埋立てが海面上昇を上回ったためと考える新しい見解を発表された(岡崎・1976)。

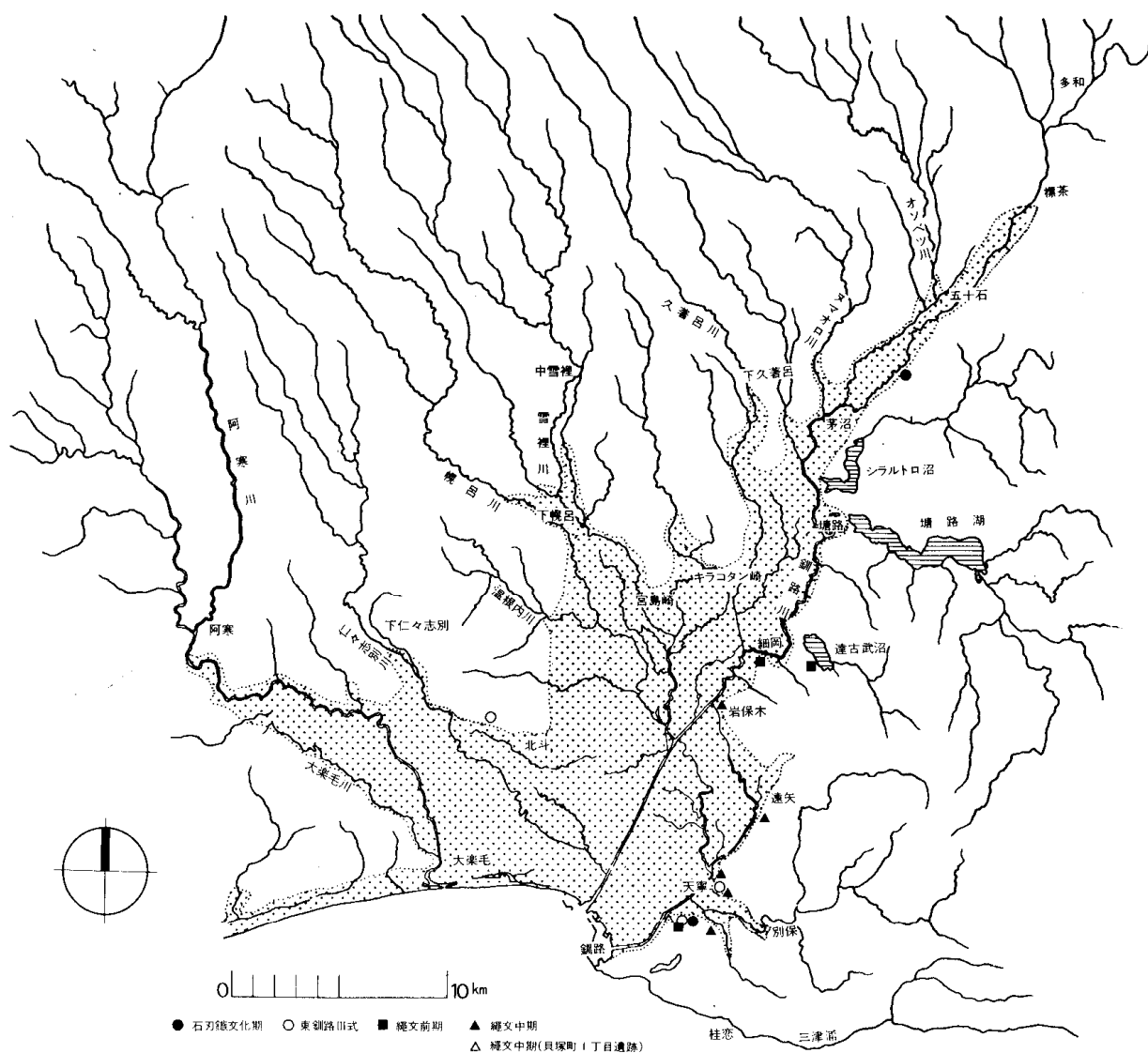
ここでは、これまでに筆者の1人澤が断片的に記載してきた縄文早期の小貝塚(岩崎ほか・1966、澤1968a・1969b・1974a、岡崎・澤1970)について再述し、あわせて北斗遺跡第1地点の小貝塚を紹介し気付いた2・3の点について触れておきたい。

1. 遺構内から貝類の出土した遺跡

墓壇及び墓壇様ピットから海産貝類が検出された遺跡に、釧路市東釧路遺跡第2地点、標茶町二ツ山遺跡第1地点がある。いずれも、石刃鍬文化期の例であるが、土砂採取・道路工事で消滅して今はない。

(1) 東釧路遺跡第2地点

釧路村テネル、釧路市貝塚町間に湾入し、幅約1kmに及ぶ別保、武佐方向に延長された低湿地に北面して突出した標高15m未満の舌状台地の一つにある。縄文海進時には、入江状の小湾を形成していた所である。この台地の両側は溺れ谷を隔てて、西側に東釧路遺跡第1地点(東釧路の貝塚)、東側に東釧路遺跡第3地点がある。ここは、昭和41年度に予備調査、翌42年度に緊急発掘ではあるが本調査が行なわれている(澤・1968a)。沼尻式、大楽毛式、浦幌式、テ



第1図 釧路湿原周縁の貝塚分布図

ンネル式類似の土器、北筒Ⅱ式、同Ⅲ式、東釧路Ⅴ式、静内中野式、縄文後期末晩期初頭に位置する土器などの出土することが知られている。遺構として沼尻式、浦幌式、東釧路Ⅴ式、北筒Ⅱ式、同Ⅲ式の竪穴住居址、浦幌式、北筒Ⅲ式の墓壇などがあり、縄文早期から中期にかけて、断続的にはあるが集落の営まれた所である。

海産の貝類は、昭和42年度の調査の際、薄くベニガラがまかれ、石刃鎌文化期の土器や石器が集中して出土した墓壇の壇底中央に、径約30cmのマウンドをなし検出されたものである。種類は、アサリ、エゾイソシジミ、エゾイガイ、カキなどで、微量の小魚片を混じえて堆積していたものである。

石刃鎌文化期の遺物は、西隣りの東釧路遺跡第1地点にも認められるが、散発的に数点の出土をみるのみで、本地点のように、まとまった遺物、そして集落址としての遺構のみられるものは付近一帯にはない。拠点的な集落が営まれた場所とみてよいようである。

(2) ニツ山遺跡第Ⅰ地点

現海岸線より釧路川沿いに直線距離にして約31km奥に入った標茶町ニツ山にある。根室段丘が標高40m～30mと低下し、釧路湿原に向かって張り出した台地端近くに位置する。台地先端部は、付近を蛇行して流れる釧路川と接し、北側と南側に小支谷が入り込んでいる。この遺跡は、筆者の1人澤により、昭和37年に発見され、昭和39年の試掘の結果薄くベニガラ^{註1)}のまかれた墓壇様のピットがあることが分かり、他に東釧路Ⅲ式土器などが出土することを知った。

その後、昭和42年に至り、標茶町教育委員会による緊急発掘が行なわれ、その後土砂採取で消滅した^{註2)}(澤・1968b、岡崎・澤・1970)。ここからは、夥しい量の石刃鎌文化期の遺物が出土しているが、石器に比し土器は少ない。他に沼尻式土器が出土している。

貝類は、昭和43年春、地主の飯島一雄氏により採集された。石刃鎌文化期の石器を集中的に出土する墓壇様のピットから少量のアサリ、イガイ類が検出されている。これは、土砂採取場となったカッテングに認められたもので、その量は、両手一杯にあふれる程度の少ないものである。

付近の石刃鎌文化期の遺物を出土する遺跡としては、標高24mの独立丘陵からなるニツ山遺跡第Ⅱ地点、飯島遺跡、ニツ山遺跡第Ⅲ地点がほぼ地続きの台地に見られ、少し離れて釧路川左岸の標高15～18mの河岸段丘端に茅沼遺跡が見られる(宇田川・豊原ほか・1976a)。

2. 小貝塚を伴う遺跡

早期の小貝塚は、東釧路遺跡第1地点(東釧路の貝塚)(澤・1968a)、テンネル南貝塚(澤・1969b)北斗遺跡第1地点などがある(澤・西編・1975)。このうちテンネル南貝塚は土砂採取で消滅し、北斗遺跡第1地点は植樹のための地ならし工事で大方が破壊されている。

(1) 東釧路遺跡第1地点(東釧路の貝塚)

これまで東釧路の貝塚と呼称されてきたのであるが、付近一帯にこの貝塚とかかわり合いを有する遺跡が地点を異にして存在することなどから、これらと区別する意味で、東釧路遺跡第1地点と呼ぶことにしている。

本遺跡のある台地の東側は、縄文前期の貝塚で占められている。この地点は昭和24年、33年、35年、40年、41年と数度にわたり発掘調査が行なわれ、縄文早期～近世アイヌに至る各時期の遺構及び遺物の出土が知られている(河野・澤ほか1962、釧路市教育委員会1967、東釧路遺跡発掘調査団1968、澤ほか1971a,b)。小貝塚は、昭和40年8月に行なわれた発掘で、第1地点1区^{註3)}及び、その拡張区で、前期の東釧路Ⅴ式を出土する貝層の下層に間層を挟んで数カ所が見られた。(岩崎ほか1966、澤1969b)。これらの貝塚は、径30cm～50cm内外の小さなブロックでレンズ状に堆積して発見されている。貝の種類は、アサリを主体にし、カキ、オオノガイ、エゾイガイ、イソシジミ、ヒメシラトリ、ホソウミニナ、クロタマキビ、エゾフネガイ、エゾタマガイなどである。時期は東釧路Ⅲ式土器に伴うものである。

全面発掘を行っていないので、これ以外のデータは望むべくもないが、昭和41年度の調査では、一例も発見されないところをみると、本来少なかったのかも知れない。

(2) テンネル南貝塚

東釧路遺跡第1地点、同第2地点、同第3地点などのある貝塚町の対岸、釧路村テンネルの

標高40m未満の釧路段丘南側崖際に所在する(澤・1969)。テンネル遺跡第1地点の中に含まれる。この一帯には、縄文早期のテンネル式、東釧路Ⅲ式、同Ⅳ式、縄文中期北筒Ⅱ、同Ⅲ式、擦文式などが出土している。また縄文早期から中期にかけて所属するかとみられる浅い円形を呈する竪穴群、擦文式の方形竪穴群、縄文中期の小貝塚群などが知られていたが、土砂採取で全滅した。貝塚は、釧路湿原に西面する台地端より東へ 約200mほど寄った地点に見い出されたもので、これより50m 東に離れ、テンネル式土器の出土する地点がある(澤・1964)。

貝塚の規模はアサリ、オオノガイを主体にカキ、ホタテ、ホソウミニナがみられ、比較的安定した堆積を示していた。貝層中には、少量の魚骨と鳥管骨とがみられ、貝層を覆う黒土層中に東釧路Ⅳ式、貝層中から東釧路Ⅲ式が検出されている。

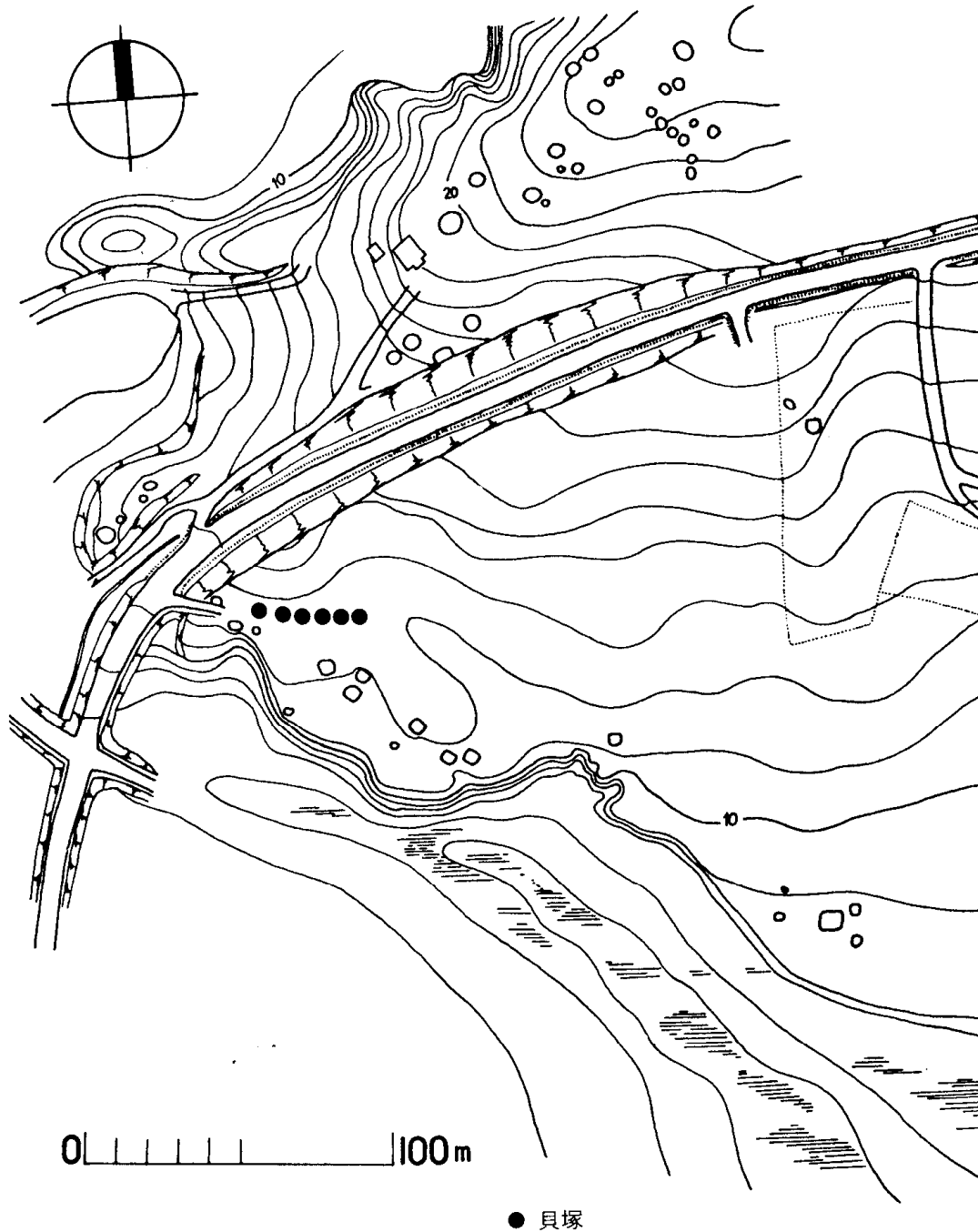
対岸の東釧路遺跡第1地点、同第2地点などと異なり、海拔高度の高い位置に営まれた貝塚として注目される。立地そのものは、先に挙げた二ツ山遺跡第1地点に類似する。こうした高低2段の遺跡のあり方は、この時期における地形上の制約から生じた一般的なものであつたらしく、特殊な集落を想定することは無理なようである。

(3) 北斗遺跡第1地点

北斗遺跡は、釧路市の北西7kmの釧路段丘にある。北斗市街の北東の湿原沿いに東西に走る低位の段丘上に位置している。この遺跡は、西、北、東の三方を高位の根室段丘に囲まれるといった恵まれた地形を土台に、円形及び方形の9群からなる竪穴群によって構成されている。その規模は、南北の幅150m～300m、遺跡内にみられる2つの沢沿いでは更にこれが延長され500m以上に及び、東西の距離2.5kmと比較的長く、釧路湿原西縁の台地にみられる遺跡群の中では、最も大きい。遺物は、先土器時代から近世アイヌに至る時期のものが知られている。縄文早期・前期・中期、擦文時代の集落址が確認されている(澤・西編・1975)。

昭和50年に至り、新たに貝塚の確認された第1地点は、この遺跡の西端に当り、道々釧路―弟子屈線が湿原を通り、海拔10m内外の低位の台地に入り、東へ折れた付近一帯を指している。この地点の最西端は、昭和48年に釧路市教育委員会の主催で、筆者らが参加して発掘調査が行なわれ、東釧路Ⅲ式、縄文式、北筒Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式、時期不明の薄手縄文土器の出土することが分かり、東釧路Ⅲ式の断面U字状を呈する溝、竪穴住居址、縄文式の竪穴住居址及び墓壇、北筒式のいずれかの型式に伴う竪穴住居址が認められている。また併せて実施した分布調査及び地形測量や過去の踏査で得た知見を加えれば、石刃鎌文化期の石刃、擦文時代の方形の竪穴、近世アイヌ文化期の貧乏徳久利に伴う貝殻の散布する地点がある。

問題の縄文早期の小貝塚は、地主による植樹を目的とする地ならし工事で、昭和48年の発掘箇所から15mほど東へ寄った地点に、東西に軸をとって、点列して発見された。湿原に面する台地南より約30m奥まったラインである。ブルドーザーで地ならしの行なわれた後で発見をみたため、貝層の大方は削られ、貝類は押された方向に散布するといった状態でみられたが、岡崎由夫氏との踏査で、浅い皿状に堆積した中心部が残っていたことから、位置とその数が6ヵ所であるのが突きとめられた。ほぼ直線上に点在した貝塚の位置は、東端の地層断面及び露出した土壌の色調の変化などから推して、全体に南北に緩傾斜をみせる台地の中で、東西に走る巾2m未満の微少な稜線上に形成されたものであることを知ることができた。この点列貝塚を便宜上西端から番号付して、その大きさと大よその距離関係をみると次のようになる。



第2図 釧路市北斗遺跡第1地点位置図

貝層の厚さは不明であるが、10cm以上はあったと思われる。1号は 0.5m^2 の大きさに短軸2 m、長軸3 mの東西に長い焼土の上ののっていた。焼土の厚さは15cm～20cmと厚い。2号はこれより7 m離れ、 0.3m^2 で、さらに7 m離れて 1m^2 の3号が 2m^2 ほどの焼土の上ののる。焼土の厚さは15cm内外である。これに接して 3m^2 の4号が並ぶ。4号がここでの最大規模の貝塚である。また1 m置いて 0.5m^2 の5号があり、これより4 m離れて 0.6m^2 の6号と続き、5 mの間隔を置いて前述のカツテングに突き当たり、雑木林となる。地ならしされた面積は30 m四方ぐらいであり、この点列状の貝塚をおいて他に貝塚の存在はみられなかった。

これらの貝塚を構成する貝類は、カキを主体にオオノガイ、ヒメシラトリが主要なもので、ほかに僅かの巻貝、ホソウミニナ、チシマタマガイ、ヒメエゾボラがみられるに過ぎないという貧弱なものである。しかし、これは何もこの貝塚に限ったものでなく、先に見たいずれの貝塚にも共通する現象である。

貝塚のみられた一帯に焼石が散乱して出土し、焼土などの組み合わせから、何らかの遺構があったことが想定されるが分からない。4号貝塚では、東釧路Ⅲ式土器片が検出されたが、他に明確に貝層中から出土した遺物はない。だが、貝層の位置する層序が、昭和48年度の層序でいう第Ⅴ層下部に当り、これは東釧路Ⅲ式の包含層である。このようなことから、この小貝塚群が、東釧路Ⅲ式の時期に所属することは疑えないところである。

3. 若干の考察

釧路湿原周縁の台地にみられる縄文早期の「縄文海進」の様相を知る手がかりとなる生物遺骸を出土した遺跡は以上で尽きる。時期的には、石刃鎌文化期が2例、東釧路Ⅲ式が3例とそう多くはない。先ずこれらの遺跡の貝類の採捕地の問題から、海進の様子をみてみよう。

東釧路Ⅲ式の3例は、縄文前期の海進最盛期の大型貝塚である東釧路や細岡(河野・1958、岡崎・澤・1968)の大型貝塚に比すべくもないが、その在りようから貝塚であることには間違いない。3遺跡の立地からみて、すでにこの時期に釧路の低地へ海水の進入があり内湾が形成され、採捕可能な貝類の生息環境が整えられていたと考えてよい。岡崎由夫氏の報告になる釧路市武佐の沢で発見された縄文早期の海水準を示す一部貝混じりの中粒砂層の存在は、これを裏付けるものである(岡崎・1976)。

これに引き換え、石刃鎌文化期の2例は、いずれも墓壇及び墓壇様ピット出土という特異な性格の産物で、貝塚と呼べるものではない。東釧路遺跡第2地点はまだしも、二ツ山遺跡第1地点は現海岸線から約31km離れた奥地にあることから少し不安が残る。しかし、これら石刃鎌文化期に所属する2遺跡にみる貝類は、内湾性の潮間帯、またはこれより深度を下げる砂泥底や岩礁に生息する二枚貝で高鹹水のイソシジミの仲間、イガイの仲間を含むものである。もし、これらの鹹水産の貝類が遺跡付近で採捕されたとするならばこの時期における海進は相当に進んでいたとみななければならない。これは、石刃鎌文化期と東釧路Ⅲ式間の時間の幅が鍵となる。

二ツ山遺跡第1地点においては、Ma-f 火山灰層の下層に東釧路Ⅲ式、石刃鎌文化期、沼尻式の3つの文化層がみられた。最も古い沼尻式の絶対年代は、東釧路遺跡第2地点発見の住居址床面の木炭から、 $7,130 \pm 130$ Y. B. P という測定値が得られている。東釧路Ⅲ式の直上を覆う Ma-f 火山灰層は、標茶町周辺一円に広がるものであるが、 $6,430 \pm 130$ 、 $7,190 \pm 230$ 、 $6,900 \pm 200$ Y. B. P という C14 による測定値が知られている(岡崎・1976)。かかる年代値から得られる知見は、石刃鎌文化期と東釧路Ⅲ式の年代が略 7,000年前を前後する極めて短いものであるということである。従って、新しい東釧路Ⅲ式の海進状況から推しても、石刃鎌文化期における古釧路湾の形成度合いは、かなり進行したものであったことがうかがわれる。けれども、これが即ち二ツ山遺跡周辺まで及んでいたものかどうかは定かでない。だが、海跡湖沼として知られる海拔高度 8 m の湖面高度を有する塘路湖の水深が 9.0 m と現海面より低く位置することは、岡崎由夫氏が説かれてきたように、早期の海進がすでにこの付近まで達していたことを示唆す

るものである(岡崎・1969、1974、1975、1976)。これをより具体的に究明するには、付近一帯の地下に埋没した化石谷のデーターが必要であるが、今はない。

ひるがえって、単位集団の生活領域に視点を移し、そこから貝類採捕の範囲を類推してみよう。この場合、遠隔地での採捕や、他の集団との交換を前提としない。

今日、釧路湿原周縁、つまり釧路川水系において、石刃鎌文化期の遺跡は24ヵ所が知られている。テンネル式土器の出土地4ヵ所を加えれば28ヵ所となる。二ツ山遺跡第1地点はこの中^{註4)}にあつて、規模・内容からみて拠点的な集落の営まれた遺跡の一つである。ほかにこのような性格を示す遺跡に、湿原北西縁の下幌呂遺跡A地点(澤・西・1974)、本稿で紹介した東釧路遺跡第2地点が入る。

さて、縄文時代の生活領域だが、これについては、市原氏(市原・1959)の大井川流域における径10km～10数km、樋口昇一氏の松本平における半径4km(樋口ほか・1964)、向坂鋼二氏の遠江平野での半径3km(向坂・1970)、戸沢充則氏らの市川市における2.5～3km圏内(杉原・戸沢・1971)とする説がある。これらは地域、時期を異にしているので、一概に北海道の遺跡に当てはめることはできないが、藤本強氏は「採集民の行動半径としては10km以下の距離が通例とされており、もっとも高いのは遺跡周辺であるとされ、居住地から2時間の歩行の距離で食料を得ている」という国外の説を引用し、常呂川流域の縄文中期の遺跡分布から、同流域の生活領域は、向坂鋼二氏の半径3～4km説を採用できるとされている(藤本・1972)。この考え方は細部にわたる分析を行っていないが、釧路湿原周縁の台地にみられる東釧路Ⅲ式や同じく中期には、ほぼそれに近い様相がうかがえそうである。ともあれ、このようなことを参考に、石刃鎌文化期の生活領域を考えてみるに、二ツ山遺跡第1地点と下幌呂遺跡A地点は、湿原を間にしながら14km離れて位置するといった格好の位置関係を保っている。発掘調査例がない今、明言をはばかるところであるが、同じようなことは、東釧路遺跡第1地点を中心とした円弧から出発し、二ツ山を経て多和に至る釧路川左岸の台地に分布する遺跡群についてもいえる。半径7kmの領域で貝類採捕の範囲を探ぐれば、塘路付近までがこの圏内に入り、向坂鋼二氏の3kmをとるならばシラルトロ沼周辺までがその生活領域とされよう。しかし、これには石刃鎌文化期の遺跡群がそれぞれ7km、3～4km圏内の生活領域を有しながら同時性をもって存在したとする証が必要であるが、その上での正確なデーターはない。だが、遺跡が拠点的な性格を示す大規模遺跡を中心に、小規模遺跡を点在させてある一定の距離を保ち存在するということはそこに何らかの意味を求めてよいであろう。それは生活領域を示すものとするのが最も考え易いところである。したがって、シラルトロ沼周辺まで、あるいは塘路湖周辺までとする採捕地の推定も、あながち無意味なことではあるまい。一応、縄文早期の石刃鎌文化期における海進による汀線を想定する目安となろう。早期の海進は、これまで言われてきたように、意外に早く奥地まで達していたことが推察される。

最後に、縄文早期の海進の時期と、将来新たに発見される小貝塚の可能性について触れておきたい。

釧路地方の縄文早期の平底の鉢形土器群には新旧二つのグループがある(澤・1969a)。古いグループに沼尻式、東釧路Ⅰ式、大楽毛式などがあり、ほかに型式不明の土器群がある。新しいグループには、テンネル式、浦幌式、東釧路Ⅱ式、東釧路Ⅲ式、コツタロ式、中茶路式(仮称)、東

釧路Ⅳ式がある。これらの土器を出土する遺跡は一型式一遺跡という数え方をすればこれまでに約127カ所が知られている。これらの出現率は、1)古いグループを一括し、さらに新しいグループを2)テンネル・石刃鎌文化期、3)東釧路Ⅱ・Ⅲ・コッタロ、4)中茶路・東釧路Ⅳの3グループに分けてみると、1)は24カ所(19%)、2)28カ所(22%)、3)57カ所(45%)、4)18カ所(14%)という割合となる。小貝塚あるいはそれを臭わす遺跡は2)と3)の時期であるが、早期全体の中でも、きわめて遺跡の出現率の高い時期に現われていることが知られる。こうした数値的割合の中で、本稿で紹介したような遺跡は2)で7%、3)で5%と少ない。だが、早期の遺跡のほとんどが古釧路湾に面した台地縁辺に集中するといった立地を考えるとこれですべてとは思われない。個々の遺跡発見のケースにもあるように、いずれも偶然と小面積の発掘によるものであり、かつ小規模なものからなることからすれば、これら以外に貝塚がなかったという結論は導き出せない。将来幾つかの遺跡が追加されることは充分予想されるところである。

しかし、比較的大面積にわたる飯島遺跡(宇田川・豊原ほか1976a)金子遺跡(宇田川・豊原1976b)の集落その他過去の小規模発掘をみてもうなづけるように、貝塚あるいはそれに類する遺構の出現率はきわめて低く不安定であることは確かなようである。釧路湿原周縁の古気候は、早期～前期へという温暖化現象が認められているが、(岡崎1973、1974、1975)北見湧別では、石刃鎌文化期に、Abies、Picea が優勢で寒冷化が認められるという花粉分析の結果が得られておりこれをもとにして、この時期の古環境を「特に冬期は今よりも、はるかに寒く、流氷も岸近くまで埋めつくしたであろう。或はアザラシ漁なども今よりは、はるかに長期にわたって行われた可能性が推定される」と説かれている。(湊・北川ほか・1973)こうした気候の温暖、寒冷という現象は貝類の生息に必要な海水温度とのかかわりが考えられようし、また標茶町周辺に特に顕著なMa-f火山灰の大量降灰は、往時のFlora、Faunaに大きな影響を与えたことは想像に難くない。こうした点に関しては、われわれの立場から十分に解明されていないが、早期の貝塚形成の不安定要素に連なるものかも知れない。

ともあれ、北海道における縄文早期の平底の鉢形土器群を出土する遺跡で、ここに改めて紹介したような遺跡は報告されていない。道南の墳火湾沿岸で早期末葉に貝塚の形成があったとされるが、それらは、報告書にみる限り、縄文尖底土器群以降に位置づけられるもので、それらを早期末葉とみるには、北黄金遺跡にみられるように平底の土器群が貝層下層の包含層にあるという層位的事実からしても、ためらわざるを得ない(名取・峰山1954)。このようなことは網走大曲洞穴についてもいえる。よって、早期のこのような遺跡は、今のところ、釧路湿原周縁に限られるといっても過言でない。したがって、その存在は、縄文海進初期の様相を知る上で重要な遺跡とされるが、東釧路遺跡第1地点以外は、土木工事等で破壊され消滅しているのが惜まれる。

〔付記〕本稿を草するにあたり、種々ご教示をいただいた北海道教育大学釧路分校岡崎由夫先生、北海道教育庁文化課竹田輝雄氏、標茶町郷土館豊原熙司氏、釧路村教育委員会山本文男氏に対し、銘記して感謝申し上げる。

【註】

- 註1) 昭和39年8月23日、筆者の1人澤のほかに、桑原護、高居昌輝、藤村久和の3氏が参加して行なわれた。その際、墓壇とみられるピット7ヶが検出された。短径70～85cm、長径80～120cmに及ぶものである。この調査では石刃鏃、石刃、石槍なども出土した。土器は出土していない。土砂採取のため、疑似ローム面まで剥かれていて、ピットの正確な深度は不明である。
- 註2) 報告書未刊、資料は標茶町郷土館に保管されている。
- 註3) 貝類の記載については、1965年8月21日の澤の野帳をもとにしている。
- 註4) 本稿で用いている遺跡数は、昭和52年4月刊行予定の釧路叢書18巻「釧路湿原」に収録された「釧路湿原の遺跡分布」の知見をもとにしている。これらの地名表の作成には、昭和52年1月現在のデーターが含まれている。

【参考文献】

- 赤松守雄(1969)「北海道における貝塚の生物群集」地球の科学第23巻2号
- 五十嵐八枝子・熊野純男(1973)「湧別市川遺跡周辺における沖積世の古気候変遷」湧別市川遺跡 pp.99～104
- 市原寿文(1959)「縄文時代の共同体について」考古学研究第6巻第1号、pp.8～12
- 岩崎隆人ほか(1966)「東釧路貝塚発掘日誌(抜すい)」 釧路市立郷土博物館々報Nos. 171.172. 173, pp. 9～15
- 宇田川洋・豊原照司ほか(1976a)「釧路川中流域の縄文早期遺跡―飯島遺跡」
- (1976b)「釧路川中流域の縄文早期遺跡―金子遺跡」
- 大場利夫(1967)「網走大曲洞穴」日本の洞穴遺跡pp. 15～28
- 岡崎由夫(1969)「釧路川の地学」釧路叢書第11巻釧路川所収pp. 11～67
- (1975)「釧路郡釧路村遠矢第2チャシ跡の花粉分析と最近の古気候の変遷」
- 遠矢第2チャシ跡遺跡発掘報告書 pp. 110～117
- (1974)「釧路の自然史」新釧路市史第1巻自然・先史編所収pp. 25～135
- (1976a)「火山灰と古地理」釧路川中流域の縄文早期遺跡―飯島遺跡―pp. 9～13
- (1976b)「飯島遺跡における花粉分析とそれに基づく最近の古気候の変遷」釧路川中流域の縄文遺跡―飯島遺跡―pp. 48～53
- 岡崎由夫(1976c)「金子遺跡の花粉分析と古気候の変遷」釧路川中流域の縄文早期遺跡―金子遺跡―pp. 69～75
- (1976d)「貝塚と自然貝層の新発見と低地の古地理変遷との関連」
- 釧路市史研究紀要pp. 1～4
- 岡崎由夫・鈴木順雄(1975)「釧路湿原の地形と地質」釧路湿原総合調査報告書 pp. 37～79
- 岡崎由夫・澤 四郎(1968)「釧路村トリトウシ貝塚調査略報」釧路考古学会連絡紙Vol. 1―6
- 岡崎由夫・澤 四郎(1970)「縄文早期の釧路」新釧路市史会報第1巻8号pp. 1～9
- 釧路市教育委員会(1967)「東釧路遺跡発掘報告」
- 河野広道(1958)「トリトウシ貝塚」北海道学芸大学考古学会連絡紙第11号pp. 40～41

- 河野広道・澤 四郎ほか(1962)「東釧路―東釧路貝塚発掘調査報告書―」
- 澤 四郎(1964)「北海道釧路村テンネル第1地点出土の土器について」
釧路の古代文化第6集pp.16～22
- 澤 四郎(1968a)「東釧路遺跡第2地点発掘調査概報」
- 澤 四郎(1968b)「釧路地方における石刃鍬の編年的位置について―伴出土器を中心に―」新釧路市史会報第2巻第3号pp.12～17、(1973)北海道の文化27号に転載。
- 澤 四郎(1969a)「道東における早期縄文土器の編年について」釧路史学創刊号pp.―――(1969b)「釧路川流域の先史時代」釧路叢書第11巻釧路川所収pp.216～271
- 澤 四郎ほか(1971a)「東釧路遺跡第1地点(東釧路の貝塚)発掘報告―昭和45年度―」釧路市立郷土博物館々報No.209
- ―――ほか(1971b)「東釧路遺跡第1地点(東釧路の貝塚)発掘報告―昭和46年度―」釧路市立郷土博物館々報No.212
- 澤 四郎(1974a)「縄文時代の釧路」新釧路市史第1巻自然・先史編pp.153～216
- 澤 四郎・西 幸隆(1974)「北海道鶴居村下幌呂遺跡A地点出土の遺物について」釧路市立郷土博物館紀要第3輯pp.17～29
- 澤 四郎・西 幸隆編(1975a)「釧路市北斗遺跡調査概要」釧路市教育委員会
- 澤 四郎・西 幸隆(1975)「釧路湿原周縁の遺跡分布」釧路湿原総合調査報告書
- 杉原荘介・戸沢充則(1971)「貝塚文化」市川市史第1巻pp.145～302
- 名取武光・峰山 巖(1954)「伊達北黄金遺跡」
- ―――・―――(1957)「若生貝塚」北方文化研究報告第12輯
- ―――・―――(1963)「茶呑場遺跡」北方文化研究報告第18輯
- 東釧路遺跡発掘調査団(1967)「東釧路遺跡発掘報告」
- 樋口昇一ほか(1964)「長野県東筑摩郡朝日村熊久保遺跡調査概報」信濃第16巻第4・第7号、昭和39年4月・7月号別刷
- 藤本 強(1972)「常呂川下流域を中心とした地域の一般調査と竪穴群の実測」常呂本文編pp.9～50
- 湊 正雄・北川芳男ほか(1973)「湧別市川遺跡の地学的情報」湧別市川遺跡pp.85～95
- 向坂鋼二(1970)「原始時代の郷土圏」郷土史研究と考古学pp.257～299